

TOHOKU × WORLD

東北は世界と強くつながっている

- 日本語版
- 英語版



TOHOKU × WORLD

東北は世界と強くつながっている

Contents

Page 4	JICA東北からのメッセージ
Page 5	“多様な社会の共鳴によるレジリエンス”を目指して
Page 6	データで見る東北と世界のつながり
Page 8	東北から踏み出す それぞれの一步
	<u>元JICAボランティア</u>
	01. 元持 幸子
	02. 秋山 千恵・齊藤 弘紀
	03. 常陸 奈緒子
	<u>草の根技術協力事業</u>
	04. 畠山 信 (NPO法人 森は海の恋人)
	05. 鶴岡 信太郎 (一般社団法人 東松島みらいとし機構) 川口 貢史 (東松島市復興政策課)
	06. 島田 昌幸 (株式会社 ファミリア)
	<u>教師海外研修</u>
	07. 大槻 孝宏
	<u>派遣中JICAボランティア</u>
	08. 八島 ゆみ
	<u>研修事業</u>
	09. Ms. Corazon Tecson JIMENEZ
	10. Mr. Tomy Mulia HASAN
	11. Mr. Humberto Enrique MARIN URIBE
	12. Ms. Nuchada CHAROENPANICH
	13. Mr. Khalil MOUSSAOUI
	14. Mr. Ghislain Sedote DEGLA
Page 16	ODAとJICA / JICA東北の役割
Page 17	JICA東北の事業紹介
Page 18	JICA東北 Information

JICA東北からのメッセージ

日本は世界と共存共栄であり、お互いに助け合いながら世界が直面する苦難を乗り越えていかねばなりません。

JICA東北では、毎年、開発途上国から多くの研修員を東北各地で受け入れています。研修を受け入れてくださる地域の皆さんが、長年培われた技術やノウハウと社会制度を研修員たちに伝えると同時に、研修員からも刺激を貰って地域に活力が生まれる様子を我々は見てきました。また青年海外協力隊員やシニア海外ボランティアとして世界各地で活躍をされている東北出身の多くの方がおられ（2015年1月末累計3,417名）、さらには東北各地で震災からの復興のなかにある被災地や、過疎や高齢化という問題に直面している地域が、アジアはじめアフリカで草の根レベルで技術支援を行ない、開発途上国と学び合い、これからの新しい社会を海外と国内という垣根を乗り越えて一緒につくろうとする取り組みも生まれています。

震災からの復興のさなかで、私たちは、これまでの価値観を改めて問い直す必要があります。異文化でありながら我々と共通する課題に直面する、しかし、たくましく生きる開発途上国の人たちと共に新しい社会の形をつくるのが、世界全体で今求められている時だと思えます。

地域が、地域にある資源を見つめ直し、それぞれの特性を持って持続的な発展をすることを目指し、多様な豊かさが存在する社会を国内外とのつながりのなかでつくろうとする努力に、JICA東北は支援し続けていきたいと考えています。

2015年3月

JICA東北 支部長
半谷 良三

“多様な社会の共鳴によるレジリエンス”を目指して

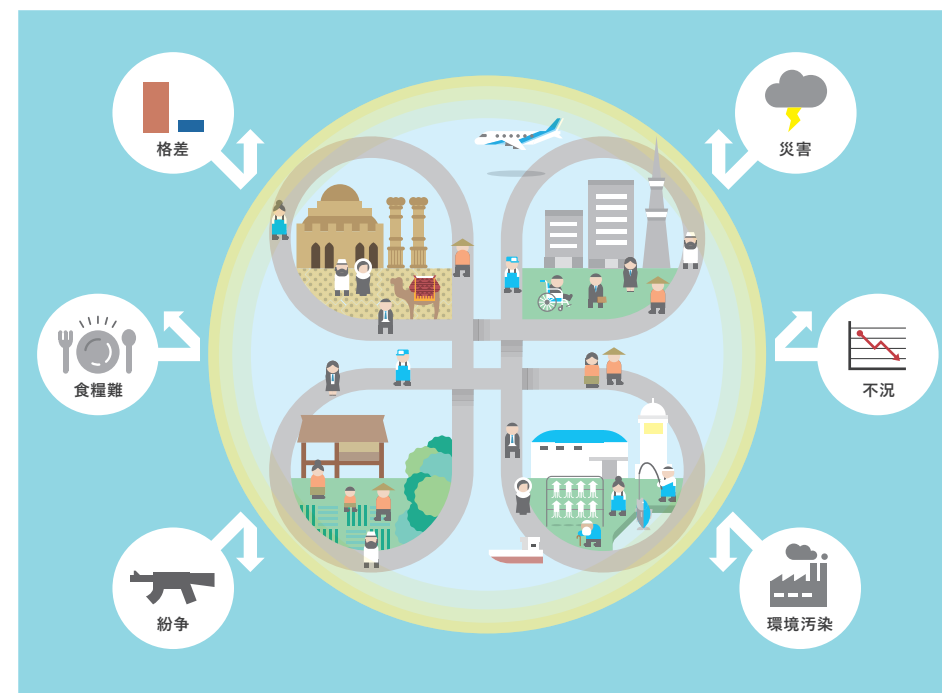
2011年3月11日、東北地方は、東日本大震災によって未曾有の危機に見舞われました。しかし世界各国からの多大な支援によって、東北は復興への道を歩みはじめています。復興を目指すにあたっては、未来の地域・社会のあり方について考える必要があります。各地域の復興過程では、決して画一的な発展ではなく「様々な地域がそれぞれ個性を持って発展すること」を目指し、「多様な豊かさが存在する社会をつくること」が、今求められています。

東北をはじめ世界中には、人・文化・伝統・価値観・

自然・災害等、様々な個性を持った地域があります。その個性を持ち合わせた地域同士、あるいは基準の違う者同士がつながり合うことで、知見や考え方を共有でき、そこから新しい社会のヒントが生まれます。それぞれの地域が主体性を持って全員参加型の包摂的な社会を目指し動くこと、それが災害・不況・紛争・気候変動といった脅威に対するレジリエンス※につながります。

※レジリエンス【resilience】

脆弱性（vulnerability）の反対の概念。「回復力」、「抵抗力」、「復元力」、「耐久力」など多様な意味を持つ。



データで見る 東北と世界のつながり



東北から海外に派遣されたボランティア

(総人数: 3,417人)

2015年1月31日までの東北6県累計データ

アジア: 1,068人

インド	21
インドネシア	73
ウズベキスタン	15
カンボジア	50
キルギス	19
スリランカ	85
タイ	56
タジキスタン	1
ネパール	107
パキスタン	8
バングラデシュ	114
フィリピン	144
ブータン	39

ベトナム	29
マレーシア	146
モルディブ	22
モンゴル	32
ラオス	59
中華人民共和国	46
東ティモール	2

アフリカ: 1,012人

ウガンダ	52
エチオピア	53
ガーナ	95
ガボン	4
カメルーン	3
ケニア	126
コートジボワール	11
ザンビア	106
ジブチ	9
ジンバブエ	38
スーダン	2
セネガル	67
タンザニア	123

ナミビア	8
ニジェール	36
ブルキナファソ	34
ブルンジ	1
ベナン	22
ボツワナ	13
マダガスカル	11
マラウイ	142
モザンビーク	14
リベリア	18
ルワンダ	17
南アフリカ共和国	7

中南米: 773人

アルゼンチン	17
ウルグアイ	15
エクアドル	38
エルサルバドル	43
ガイアナ	3
グアテマラ	46
コスタリカ	35
コロンビア	30
ジャマイカ	22
セントビンセント	5
セントルシア	7
チリ	21
ドミニカ	2

ドミニカ共和国	57
ニカラグア	31
パナマ	27
パラグアイ	118
ブラジル	40
ベネズエラ	12
ペリーズ	3
ペルー	22
ボリビア	68
ホンジュラス	85
メキシコ	26

大洋州: 280人

キリバス	3
サモア	45
ソロモン	32
トンガ	35
バヌアツ	23
パプアニューギニア	45
パラオ	19
フィジー	33
マーシャル	19
ミクロネシア	26

中東: 238人

イエメン	5
エジプト	19
シリア	46
チュニジア	37
モロッコ	90
ヨルダン	41

欧州: 46人

セルビア	1
トルコ	6
ハンガリー	7
ブルガリア	16
ポーランド	9
ルーマニア	7

Motomochi Sachiko / Costa Rica

Akiyama Chie / Rwanda

Saito Hiroki / Ethiopia

Hitachi Naoko / Senegal

Hatakeyama Makoto NPO Mori wa Umi no Koibito / Philippines

Tsuruoka Shintaro HOPE / Indonesia

Kawaguchi Takafumi Higashimatsuhima City / Indonesia

Shimada Masayuki Familiar Co., Ltd. / Cambodia

Otsuki Takahiro / Indonesia

Yashima Yumi / Brazil

Corazon Tecson Jimenez / Philippines

Tomy Mulia Hasan / Indonesia

Humberto Enrique Marin Uribe / Chile

Nuchada Charoenpanich / Thailand

Khalil Moussaoui / Morocco

Ghislain Sedote Degla / Benin

東北から踏み出す それぞれの一步

東北から海外へ、海外から東北に……

JICAの事業には

東北から、そして世界各国から
大勢の方が参加しています。

「ボランティア？ 開発途上国？」

遠くのことを感じるかも知れないけれど

JICA事業に縁のある人は

実は意外と身近にいたりして。

アフリカや南米で活動するボランティア、

アジア諸国と共に歩む企業・NPO・自治体、

中東から被災地を訪れた研修員。

JICA東北の事業を小さなきっかけに

東北と世界で活躍しているみなさんに

それぞれの「一步」、 「今」、そして「未来」を尋ねました。

元持 幸子

MOTOMOCHI Sachiko

〈NPO法人 つどい〉事務局長。青年海外協力隊に参加し、コストリカで地域の障がい者の社会参加を促進するプロジェクトに携わる。現在は〈つどい〉にて岩手県大槌町のまちづくり活動を行なっている。

「誰もが自分らしく暮らせる地域をつくりたい」という思いから海外ボランティアに参加しました。活動中、様々な問題に直面しましたが、解決方法は一律ではないため、状況に合わせた発想が求められました。そしてその考え方は震災復興後のまちづくりにも同様に求められることであり、海外での経験が現在の活動にも役立っています。震災から4年が経ち、今求められていることは地域住民の主体性です。〈つどい〉の活動においては、地域の方の主体性を重んじ、私は裏方に徹しています。地元大槌町の復興を目指し、まちづくり活動を続ける先には、ハンディキャップの有無に関わらず「住み良いまち」と感じてもらえる大槌町があることを願い、今できることを続けていこうと思っています。



秋山 千恵・齊藤 弘紀

AKIYAMA Chie, SAITO Hiroki



左:秋山 右:齊藤

ともにJICA地域復興推進員。

秋山 千恵／青年海外協力隊に参加し、ルワンダで稲作の指導に携わる。現在は宮城県東松島市宮戸地区で地域住民が宮戸島を元気にしたいという思いから始めた「げんちゃんハウス」(コミュニティビジネス)に協力し、地域活性化に取り組んでいる。齊藤 弘紀／青年海外協力隊に参加し、エチオピアの学校でPCインストラクターとして従事。現在は宮城県東松島市野蒜地区で地域コミュニティ形成支援を行なう。そのなかで住民との情報共有のために広報誌「野蒜復興新聞」を制作。

秋山 現在活動している宮戸地区では少子高齢化は目に見える課題です。今、宮戸に誇りを持って暮らしている方たちが、生き甲斐を感じながら楽しく過ごせるような環境づくりのお手伝いができなかと考えています。例えば、活動拠点の飲食店「げんちゃんハウス」で、宮戸のPRを行ったり、浜のお母さんたちの料理を紹介できるような、そんな場所にできればと構想しています。

齊藤 野蒜では、高台移転される方と元地に残る方がおり、それぞれのまちづくりが平行して行なわれているため、両者の意識や情報量に差が生まれ問題が起きやすい状況です。新たなコミュニティ形成がスムーズに進めば、という思いで「野蒜復興新聞」を通じて情報発信しています。また、誌面の中で野蒜の歴史を紹介するコーナーも始めました。私もそうですが、地元の人って意外と知らなかったりしますよね。地域の外から来た人間が持つ着眼点を活かし、野蒜の良さを次世代に伝えていきたいと思っています。

常陸 奈緒子

HITACHI Naoko

岩手県釜石市の復興支援組織〈釜援隊〉所属。青年海外協力隊に参加し、セネガルで漁村集落地域の女性と子供の生活向上支援に携わる。帰国後、岩手県釜石市で復興支援活動に従事する。

セネガルに行く2週間前に震災が起きました。悩んだ末に行くことを決意しましたが、その時に「帰国後は地元のために何か貢献する」という目標ができました。青年海外協力隊の任期は2年です。任期を終えて私が去っても、現地の住民だけで活動を継続できるよう、意識して行動しなければなりません。このことから、常に「報告・連絡・相談」を心がけ、複数人で協力する体制づくりを意識するようになりました。現在は地元釜石で、仮設住宅でのコミュニティ形成や、写真を通して震災の教訓や思いを次世代に伝える活動等を行なっています。そして復興においても海外ボランティアと同じように、地域の人を中心になって、私たちのようなサポーターがいなくなっても成り立つような仕組みの構築が大切だと感じています。



島山 信／NPO法人 森は海の恋人

HATAKEYAMA Makoto

宮城県気仙沼の漁師による植林活動を起源に持つ〈NPO法人 森は海の恋人〉副理事長。環境保全・環境教育・森づくり・まちづくり事業に従事。JICA草の根事業を通じ、フィリピンと“森と人と海の共生”のための環境意識向上プロジェクトに取り組む。

フィリピンでは一次産業と二次・三次産業従事者の間に自然環境への意識の差があります。そのなかで同じ教育をしても意味が無く工夫が必要です。私は自然環境保護にも生計向上にも偏らない、バランスのとれた自然観を持つ人材育成を重視しています。自然環境の変化等から、将来漁業は立ち行かなくなる可能性があります。そこで六次産業化する等の転換も必要です。現在、気仙沼の活動拠点に、獲れたての海の幸や加工品を提供するカフェを建設中です。また、環境保全を取り入れたツーリズムも計画しています。牡蠣の養殖場には来ないがカフェには人が来る、重要なことは持続可能な仕組みづくりです。気仙沼でもフィリピンでも、自然を保護すればするほど、豊かに暮らせる社会であることが理想です。

鶴岡 信太郎／一般社団法人 東松島みらいとし機構 川口 貴史／東松島市復興政策課

TSURUOKA Shintaro, KAWAGUCHI Takafumi

鶴岡 信太郎／〈一般社団法人 東松島みらいとし機構〉(愛称: HOPE) 所属。JICA草の根事業にて、スマトラ沖地震被災地、インドネシアのバンダ・アチェ市と相互復興推進プログラムを実施中。川口 貴史／宮城県東松島市復興政策課主査。HOPEと連携し、持続可能かつ安全で安心なまちづくりに取り組んでいる。

鶴岡 復興においてハード面の整備はもちろん大事ですが、地域のコミュニティのあり方、地域住民がどう動くかを同時に考えることも大事なことです。そしてどんなに外部からの支援があったとしても、住民のやる気が奮い立たなければ意味がありません。復興の計画は長期にわたります。日々の生活のなかで住民がいかに充実感を得られるかが重要なことであり、その日々の小さな積み重ねがあるからこそ、先の長い話につながれるのだと思います。具体的に何をどう積み重ねるのか、戦略的にそして計画性を持って実行する、それが私たちHOPEの役割だと考えています。

川口 今回の震災に当たっては、国内のみならず国外からも数多くのご支援を受けています。その影響により、東松島市では海外と連携するという考えが生まれました。震災復興の過程で、同様の津波災害からの復興を進めてきたバンダ・アチェ市の種々の取り組みを参考にし、被災地同士がお互いに情報共有・協力し合うことによって、知見と事業のクオリティを高めたいと考えています。



左:川口 右:鶴岡

島田 昌幸／株式会社 ファミリア

SHIMADA Masayuki

〈株式会社 ファミリア〉代表取締役。一次産業から六次産業において「食」にこだわった事業展開や、地域活性プランニング等、活動の幅は多岐にわたる。JICA草の根事業では、障がい者雇用を前提としたビジネスモデル構築事業に取り組む。

現在カンボジアにおいて、地域の障がい者の方を雇用し農産物加工品の生産や流通体制のモデルづくりを行なう事業に取り組んでいます。一次産業では消費期限は大きなネックです。しかし、農作物を新鮮なうちにパウダー化すれば、消費期限は伸び、商品展開の幅も広がります。また、畑の中で乾燥加工してしまえばコストも抑えられます。今、自分たちの持っている乾燥技術を取り入れたジェラートやお菓子を考案しています。東日本大震災においては、多くの国からご支援いただきました。震災から立ち上がり、他の国へ支援という形でお返しする、それができてはじめて私にとっての復興が完遂すると考えています。カンボジアでの活動にはそういった意味も込められているんです。



八島 ゆみ

YASHIMA Yumi

現在、JICA日系社会シニアボランティアに参加中。ブラジルにある移民1世と2世の日系人を中心とした高齢者施設「サントス厚生ホーム」で介護補助を中心に活動中。

「サントス厚生ホーム」は入居者の90%以上が移民1世と2世の日系人です。そういった状況で活動していると母語で会話できることの重要性を痛感します。余命わずかな入居者の方が食事を食べられずにいた時、看護師にポルトガル語で「食べなければダメよ」と声をかけられていました。「こういう時、ポルトガス（ポルトガル語）ってのはシンドイなぁ……。その一言が忘れられません。異国へ移民した高齢者にとって、母語で会話できるということがどんなに嬉しくそして意味のあることか。そういった経験から、私は日本語でも、つたないポルトガル語でも、入居者の方の母語で会話するよう心がけています。母語での会話は、特殊な技術でも知識でもありませんが、「安心して老いていただくための援助」となることを、ここブラジルで気づかされました。

大槻 孝宏

OTSUKI Takahiro

宮城県仙台市立八幡小学校教員。JICA教師海外研修において、スマトラ沖地震の被災地インドネシアのバンダ・アチェ市と首都ジャカルタを訪問し、現地視察のなかからこれからの防災教育等を学ぶ。(研修期間:2013年12月21日~12月30日)

10年後、震災を経験した子供たちがどう成長しているのか、このことがとても気になっていました。宮城の教師として、震災や防災教育について考えるのはとても重要なことです。これからの防災教育とは何か、子供たちに伝えられることは何か。そのヒントを求め、同じ被災経験のあるインドネシアへの研修に参加しました。研修は、防災・復興について改めて考えるきっかけにただでなく、私が経験してきたことを話すことによって、海外に興味を持つ子供も現れるという効果もありました。未来をつくるのは今の子供たちです。今後も積極的にチャンスを見つけて海外へ行き、現地の人々と交流しながら、そこで得た経験子供たちに伝え、国際理解を通して自分たちに何ができるかを共に考えていきたいです。



左:八島

震災からの復興プロセスには、開発途上国の地域づくりにも役立つヒントが含まれています。

JICA東北は、この取り組みを開発途上国に紹介し、被災地とつなげることを目的に、

2015年1月までに111か国、2,948名の研修員を被災地に受け入れてきました。

なかでも、2012年度から実施している「東日本大震災復興プロセス研修」では、

被災地の意欲的な復興の取り組みを紹介しています。

そこに参加した研修員に「東北で学んだこと」、「学んだことをどう活かしているか」を聞きました。



Corazon Tecson JIMENEZ

コロン・テクソン・ヒメネス
出身国：フィリピン
所属：マニラ首都圏開発庁
2012年度参加

研修で学んだことは、復興プロセスでは「実施段階ではなく計画段階から地域住民を巻き込むことが大事」という点です。日本の復興の進め方はとても丁寧だと感じました。また、日頃から子供たちへの防災教育をすることの重要性も学びました。今回の研修の8か月後に台風ヨランダがフィリピン・タクロバンに襲来した際には、東日本大震災の被災地での学びを活かすことができ、研修で見聞きしたことが、私にとって活動の支えとなりました。



Humberto Enrique MARIN URIBE

ウンベルト・エンリケ・マリン・ウリベ
出身国：チリ
所属：国立自然災害管理研究センター
2013年度参加

復興にはインフラの建設・再整備に加えて、地域住民の主体性や生活の再建が不可欠であり、それをもって「真の復興」と言えることを学びました。今回の研修で私が着目したことは「メンタル面」の支援の重要性です。被災した後に、地域住民自身が生活や生業を再建していく上で必要となる「意欲や思考力（見通し）の維持・向上」等、メンタル面から支援することが不可欠と考え、現在、その枠組みを提案している最中です。



Tomy Mulia HASAN

トミー・ムリア・ハサン
出身国：インドネシア
所属：大統領府室管理災害環境局
2012年度参加

インドネシアではスマトラ島沖地震の際、震災後の復興は早かったのですが、防波堤等ハード面の見直しは疎かになっていました。今回の研修で、被災後に最も重要なのは「落ち着いて復興計画を策定すること」だと学び、事前復興計画の策定や行政と住民の信頼・協働関係構築の参考にしています。また、帰国後は政府内の縦割り体制を横串にした「合同事務局」の設置に向けて政府内でセミナー等を多く開催し、知見を共有しています。



Nuchada CHAROENPANICH

ヌチャダ・チャロエンパニッチ
出身国：タイ
所属：国家経済社会開発委員会事務局
2013年度参加

被災前、緊急時、復興時に分かれた災害対応計画や、地元住民と行政の協働体制、官民連携のオペレーションの大切さを学びました。帰国後は、政府内に災害対応部局を常設することを提案しています。さらに、地震の際は机の下に入り安全を確保する等の「小学校からの防災教育の導入」、「再生可能エネルギーの体制整備」、「おばあちゃんの知恵袋」のようなローカルな伝承を主とした「市民の知恵を広める機会づくり」等に取り組んでいます。

研修事業とは、開発途上国から人材を受け入れ、日本の技術や知識について研修を行なう事業です。

研修員のほとんどは自国で社会・経済の中心的役割を担う人材で

帰国後は日本で学んだことを活かして、自国の発展のために活躍しています。

福島県郡山市の株式会社メディサンにて

「医療機材管理・保守」コースで学んだ研修員に話を聞きました。



Khalil MOUSSAOUI

ハリル・ムサウイ
出身国：モロッコ 所属：保健省機材管理保守局 2014年度参加

モロッコでは、医師の研修に比べ医療機器に関する研修が圧倒的に少ないという現状があります。知識を必要としている人たちのために医療機器分野の知識を広げていくことは、私の使命でもあります。今回の研修では、実際にモロッコで使用している日本製の機材について直接メーカーの技術者に質問でき、さらに工場を見学することもできました。こういったことは日本でないと経験することができませんので、技術面での知識を深める良い機会となりました。また、モロッコにおいて日本人は「勤勉で働き者」という点から「お手本となる国」として学びに行く人も多いです。研修を通して日本とつながることで、日本人の持っている良い点を学ぶこともできます。それは、私にとってもモロッコにとっても意義のあることだと思います。



Ghislain Sedote DEGLA

ジスラン・セドテ・デグラ
出身国：ベナン 所属：保健省国立大学病院 2014年度参加

医療機器に関する専門知識と一緒に、「整理・整頓・清掃・清潔・躰」、いわゆる「5S」の徹底を学びました。こういった日々の積み重ねは重要だと思います。ベナンでは「2S」の「整理・整頓」からはじめる等、少しずつ取り入れていくことで受け入れられるのではないかと考えています。実際に私の職場では「5S」を取り入れたことで「清掃」や「時間厳守」といった点が守られるようになりました。個人的には家庭にも取り入れたいですね。その他、今回の研修では「チームで働き期日を守って仕事をする」という日本人の仕事の仕方にも興味を持ちました。今後も日本とつながり協力し合うことで、人の助けとなったり、世界平和に貢献できる活動を続けられればと思っています。



JICA

JAPAN
INTERNATIONAL
COOPERATION
AGENCY

ODAとJICA

JICAは、日本のODA（政府開発援助）の実施機関として、日本の持つ豊富な人材や経験を活かし、様々な事業の中から最適な形を提案して、開発途上国が抱える課題解決に、共に取り組んでいます。

ODAには、「人道的支援」はもちろん、「お互いさま」「おかげさま」という考えも含まれています。特に、資源や食料の多くを海外からの輸入に頼っている日本は、海外とのつながりは密なものであり、ODAを通じて開発途上国の発展を支援し、それを世界の安定と平和につなげていくことは、日本にとって有益なことでもあります。

JICA東北の役割

豊かな、そして時に激しい自然に育まれた東北地方には、農林水産業の技術や、鉱山開発等、自然と共生する長年の知恵を培ってきました。そして、東日本大震災からまさに今、力強く復興しようとしている地域もあります。この東北という地域や人や文化の特色・強みを活かし、その知恵や技術で開発途上国の課題解決に貢献すべく、日々、取り組みを進めています。世界の人々が“東北”に出会い、東北の人の知恵が“世界”にはばたく。JICA東北はそんな地域の窓口でありたいと願っています。

JICA東北 WEB SITE

<http://www.jica.go.jp/tohoku/>

JICA東北の事業紹介

課題別研修・国別研修

研修員受入事業は、JICAが実施する技術協力の1つです。開発途上国の行政官や技術者に対して日本国内で研修を行ないます。「課題別研修」と「国別研修」があり、農業や鉱業等、東北地方が持つ豊かな知識と経験を活かした研修が行なわれています。

青年研修

課題別研修・国別研修と同様、技術協力の1つで、開発途上国から将来の国づくりを担う青年たちを日本に招き、専門分野についての基礎的な研修を行ない、将来の国づくりを担う若手人材の知識や意識を向上させることを目的とした研修です。

東日本大震災復興支援

JICA東北がこれまで地域の方と育んできたつながりや信頼関係を大切にしながら、海外での復興事業等の経験・人材・ネットワークも活用して、被災地のより良い復興への取り組みを支援しています。

民間連携事業

東北の中小企業の優れた製品や技術を活用することで、開発途上国の開発課題の解決や日本の国内経済の活性化を目指しています。それぞれの中小企業の海外展開の準備段階に応じて、多数の支援メニューを取り揃えています。

草の根技術協力事業

NGOや自治体、大学等がこれまでに培ってきた経験や技術を活かして企画し、開発途上国への協力活動をJICAが支援し、共同で実施する事業です。開発途上国の地域住民の生活に直接役立つ事業を行なっています。

ボランティア事業

自らの知識や経験を活かし、開発途上国の発展に貢献したいという方を政府ボランティアとして派遣しています。2015年、JICAボランティア事業は50周年を迎えました。東北からはこれまで3,417名（2015年1月31日時点）が参加しています。

開発教育支援事業

開発教育とは、開発をめぐる様々な問題と、私たちの生活とのつながりを知り、一人ひとりがその問題の解決に向けて「自分にできること」を考える教育のことをいいます。教師海外研修、出前講座等、東北の子供たち、学生、市民の方々に、開発途上国の現状や日本を見つめ直す機会を提供しています。

JICA 東北

〒980-0811
宮城県仙台市青葉区一番町 4-6-1
仙台第一生命タワービル15F
TEL: 022-223-5151
FAX: 022-227-3090
<http://www.jica.go.jp/tohoku/>



1. 青森デスク

〒030-0803
青森県青森市安方1-1-32 水産ビル5F
TEL: 017-735-2249 FAX: 017-735-2252
jicadpd-desk-aomoriken@jica.go.jp

2. 秋田デスク

〒010-0001 秋田県秋田市中通2-3-8
秋田総合生活文化会館（アトリオン）1F
TEL: 018-893-5313 FAX: 018-893-5313
jicadpd-desk-akitaken@jica.go.jp

3. 岩手デスク

〒020-0045 岩手県盛岡市盛岡駅西通1-7-1
いわて県民情報交流センター 5F
TEL: 019-654-8911 FAX: 019-654-8922
jicadpd-desk-iwateken@jica.go.jp

4. 山形デスク

〒990-8580
山形県山形市城南町1-1-1 霞城セントラル2F
TEL: 023-646-6267 FAX: 023-646-8860
jicadpd-desk-yamagataken@jica.go.jp

5. 宮城デスク

〒981-0914
宮城県仙台市青葉区堤通雨宮町4-17
宮城県仙台台合同庁舎7F
TEL: 022-275-5540 FAX: 022-272-5063
jicadpd-desk-miyagiken@jica.go.jp

6. 福島デスク

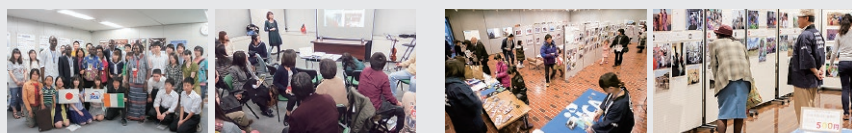
〒960-8103 福島県福島市舟場町2-1
TEL: 024-524-1315 FAX: 024-521-8308
jicadpd-desk-fukushimaken@jica.go.jp



JICAプラザ

JICA東北に隣接する、どなたでも無料でご利用いただけるオープンスペースです。開発途上国や国際協力に関する図書や、パンフレットを設置しています。また、開発途上国や国際協力の現状を伝えるための市民講座やイベントも開催しています。（開館 平日9:30～17:30）

市民参加イベント



JICAfe (ジャイカフェ) 東北

来日中のJICA研修員や帰国ボランティア等を招き、各国のお茶やコーヒー、お菓子をつまみながらアットホームな雰囲気の中、国際協力について参加者の皆さんと共に語る場を設けています。

国際協力写真展

国際協力に関心を持っていただくことを目的とし、国際協力の現場で活動するJICAボランティアやJICA専門家等が撮影した、各国の人々や文化、活動の様子の写真展を、東北各地で開催しています。

